

書評 B.R Nanda, Road to Pokistan: The Life and Time of Mohammad Ali Jinnah

著者	山口 博一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	52
号	2
ページ	80-86
発行年	2011-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007066

B. R. Nanda,

*Road to Pakistan:
The Life and Times of
Mohammad Ali Jinnah.*

New Delhi: Routledge, 2010, vi+373pp.

やま ぐち ひろ いち
山口 博 一

はじめに

1947年8月にインドとパキスタンが分離独立した時、パキスタンの初代総督になったのはモハマッド・アリー・ジンナー（1876～1948年）である。パキスタンという国家の誕生はジンナーの存在なくしては考えることができない。インドの独立にもマハトマ・ガンディー（M. K. Gandhi, 1869～1948年）が大きな役割を果たしている。しかしインドの独立はむしろ時代の趨勢であって、ガンディーがいなければ達成されなかったというものではない。ガンディーの役割はこれをどのような形で達成させるかであった。しかしパキスタンの場合はそうではない。このような国家を構想し、その理念を作り上げ、それをインドの内外に認めさせたのは一にジンナーの働きによるものであった。その生涯を知ると、パキスタン建国の由来を知り、今日のパキスタンについて判断する基準を得ることになる。これに対し、ガンディーを知ることは、彼の残した理念が今日のインドあるいは世界でなおどれだけの意義を持つかを見定めることに通じると思われる。

ジンナーについては、これまでもかなりの文献が刊行されている。資料集を除いても、伝記あるいは研究書と呼べるものは20点に近い。しかしその大部分は、パキスタン側から、あるいはムスリムの見地から書かれたものであって、インドの非ムスリムによってなされた研究はこれまで皆無といってよかった。そのこと自体が興味を引くことである。ところ

がごく最近になってインドの非ムスリムによって2冊の書物が著された。その1冊はインドのヒンドゥー主義政党に属する政治家によるもので、近く本誌で他の評者によって紹介される予定である。

もう1冊がここに紹介するナンダの著作である。ナンダは、すでに50年にわたってガンディーをはじめ多くのインドの政治指導者たちの研究を行ってきたインドの著名な歴史家である。今回はこれまで主に取り上げてきた国民会議派の指導者たちとは異なり、ムスリム・リーグ（回教徒連盟）の指導者の研究を行い、1917年生という高齢にもかかわらずジンナーの手堅い研究書を出版した。そのような書物を紹介する機会を得たことは評者の喜びである。

本書の本文は29章に分かれており、その構成を紹介するのは煩雑なので、以下では各章の題名にはあまり注意を払わないことにする。また、ジンナーの最大の対抗者は結局のところガンディーであり、2人の生涯はほとんど重なるので本書でも対比しながら描いているため、ここでは便宜上ガンディーに関して必要な補足を数箇所で行うことにしたい。なお、国民会議派、回教徒連盟はそれぞれ会議派、連盟と略することにする。

I 初期の活動

本書ではジンナーの生涯について明確な時期区分を行ってはいない。しかし、本書の理解のためには、ロンドン円卓会議、連盟のラクナウ大会とラホール大会を画期とするのが適切であろう。

ジンナーの両親はインド・グジャラート地方のムスリム商人の出身である。そのため、ジンナー自身は現パキスタンのカラチの生まれであるが、ガンディーと同じ地方の出身であるとみなされており、母語も共通している。しかしジンナーがこのグジャラーティー語を自由に話すことはなかったと思われる。重要な演説の折にはいつも早めに英語に切り替えていたからである。彼はガンディーよりも7歳ほど若かったが、ガンディーが約20年という歳月を南アフリカで過ごしたため、インドの政界の中で有力な若手指導者の地位を確立したのはガンディーよ

りも早かった。ガンディーが帰国した1915年当時、ジンナーは会議派と連盟の双方で指導的な立場にあるほとんど唯一の存在であった。彼が目指していたものは「ムスリム・ゴーカーレー」(p.47)、つまり会議派の穏健派指導者の一人で広く社会活動をも推進していたゴーカーレー (G. K. Gokhale) のムスリム版ということである。

しかし、ジンナーの行動は、当時のインド・ムスリムのおかれた立場を反映して、決して一直線なものではなかった。インドのムスリムたちは、19世紀に活動した思想家サイド・アフマッド・カーン (Syed Ahmad Khan) が提唱した「インド・ナショナリズムを止めようとするイギリスとムスリムとの計画」(p.18)の強い影響下にあったが、ジンナーはこの影響が強まりすぎることや、ムスリムの中で特権グループが勢力を持ちすぎるのを警戒して、このグループの代表たちが1906年に当時のインド総督に一連の請願を提出し、さらにその鼓舞の下に同年末に連盟を結成したことを批判した (pp.12-13)。しかしこのグループの請願は功を奏し、イギリスによる1909年の政治改革の中には、ヒンドゥーの有権者はヒンドゥーの候補者だけに投票し、ムスリムについても同様であるという分離選挙制が導入された。

当時まだ有権者は非常に限られていたが、この制度によって宗教の差をこえた政治的な対話の道が失われたのである。この改革に続く次の1919年の改革を担当したイギリスのインド相モンタギュー (Edwin Montagu) は、その報告書の中の彼が執筆したと著者が推定する部分で次のようにいっている。「信条や階級による分割は、互いに相対して組織された政治的陣営の形成を意味しており、人々に、市民としてではなく党派的な人間として考えることを教えるのである。この制度から国民的な代表制への転換がいったいどのように起こるのか、推測することは難しい」(pp.32, 316)。事態はそのとおりになった。それにもかかわらず、1930年代までのインドの政治史において、ムスリムの側から、ある場合にはジンナーも関係して、何度か分離選挙制から合同選挙制への転換、つまり見方によってはムスリ

ム側の譲歩が提案され、あるいはされかけたことは記憶すべきことである。ジンナーは1909年の改革のときから中央議院に議席を持つことになるが、分離選挙制のもとではそれは彼がムスリム有権者の投票に依存しなければならないことを意味していた。ナショナリストとしての彼とムスリムの利益の代表としての彼との間にいつも調和があるとは限らなくなるのである。

インドの少なくとも都市部の民衆を巻き込んだ規模にまで民族主義的な運動が発展するには、ガンディーが主導したサッティヤーグラハの誓約への署名が大きな役割を果たした。これは、第1次大戦後のインドにおける治安維持を狙ってイギリスが制定しようとしていた2つの法案について、もしもこれらが制定されるなら、署名者は非暴力で反対するという誓約で、最初はガンディーなど数十人の人たちが1919年2月23日に署名したものである。ジンナーの活動の本拠はボンベイ (現ムンバイ) であったが、この署名は彼に近いジンナー派 (p.58) と呼ばれていた人々がグジャラートのアフメダバードを本拠としていたガンディーを訪ね、ガンディーに従ってグジャラートで地租不払い運動を行った人々と協議した結果であった。もっともジンナーはこれに署名はしていない (p.62)。

この時期のジンナーとガンディーの関係について著者は、あるアメリカ人学者が、ガンディーが帰国した際にジンナーが述べた歓迎の言葉へのガンディーのわずかな応酬で2人の生涯の関係が決まった、それは一貫して打ち解けないものだったといっているのを批判し、それは間違いだといっている (pp.49-50)。現にジンナーは、この誓約とそれにもとづく大衆的な行動が一段落した後、イギリスに向かう船上からガンディーに非常に丁寧な手紙を書き、ガンディーもこれに答えている (pp.63-64)。もっともガンディー自身は、「私が会合でジンナーに英語ではなくグジャラーティー語を使うことを求めたときから、ジンナーはずっと私を憎んでいる」といっている [Collected Works of Mahatma Gandhi (CWMG), New Delhi: Government of India, Vol. 78, 1979, p.24]。

しかしガンディーの提案で会議派が1920年の2つの大会でインド・ムスリムたちの不満を吸い上げ、オスマン・トルコ帝国の解体とカリフ制の廃止に対するイギリスへの非協力運動（キラファート運動）を決定すると、ジンナーはこれに反対して大会の会場から去った。この運動は1922年初めの暴力事件によって中止されるまで継続した。あるイギリスの歴史家はこの時期を19世紀半ばの大反乱と1942年のインド撤退要求との間のイギリス統治者にとってのおそらく最悪の時だといっている（pp.78-79）。治安維持法案への反対に続いてガンディーの大衆政治家としての立場がこれによって確固としたものになった。

1920年代が終わりに近づくと、インドの諸政党は、イギリスが次に提案するはずの政治改革案の先手を取って、共同して1928年にひとつの憲法草案を採択した。委員長（Motilal Nehru）の名をとって「ネルー報告」と呼ばれるものである。それは、自治領としてのインドの地位、議会民主主義、ムスリムの多いボンベイ州シンド地方と北西辺境州の完全な州への格上げ、中央集権の政府、分離選挙制ではなく合同選挙制による選挙などを規定したものであるが、かねてジンナーが提案していた合同選挙制と引き換えの中央議会の定数の3分の1と、ムスリムが多数を占めるパンジャブ、ベンガル両州の州議会の定数の半数のムスリムへの留保は受け入れなかった（p.112）。

「ネルー報告」の討議の期間中ジンナーはイギリスに滞在していて不在であり、帰国直後に委員長のモーティラールから送られた「報告」を好意的に検討されたいとの手紙（pp.115-116）にもはかばかしい回答を寄せなかった。逆に彼は6項目の修正案を提出したが、その中では、上記の両州議会での留保、政府の分権化、中央議会での3分の1の留保の3つが重要であった。そしてジンナーは1928年12月28日に「多数派はえてして圧迫的で暴君的になり、少数派は彼らの利害や権利が法的に明瞭かつ明確に保障されなければ被害を受け、偏見をもたれるといつも恐れ危惧している、そして、その多数派が宗教的な多数派であるときにこの心配はさらに募るので

ある」という「理性的で雄弁な」演説を行ったにもかかわらず、まったく支持を得なかった（pp.118-119）。ジンナーは翌29年、これらの要求と分離選挙制を含む14項目を発表して強硬姿勢をとった。

他方でガンディーは、政治の舞台からは身を引き、「建設的活動」（constructive programme）と呼ぶ農村更正活動にとどまっていた。「ネルー報告」とは関係を持たなかった。しかし報告に絡むインドの将来は自治領であるべきかどうかの議論に巻き込まれる形で「ガンディーの政治への復帰」（p.128）が実現し、やがてその指導下に「塩の行進」として知られる一大非暴力不服従運動が1930年に展開される。キラファート運動の折に接近をみせたヒンドゥーとムスリムの関係はこのころには悪化していて、「行進」のためにガンディーが選んだ79人の一行の中には、病氣辞退者1名を含めてムスリムは3名いただけであった。

II ロンドン円卓会議

インドにおける次の政治改革を討議するためにイギリスが招集した円卓会議は3回におよんだが、ガンディーが会議派の代表として出席した第2次のそれを中心にみよう。1931年後半のものである。

その前年に開かれた第1回の円卓会議の出席者は合計89人で、英領インド（直轄州）から57人、藩王国から16人（うち藩王自身は3人）、イギリスの主要3政党から16人であり、前2者は、ジンナーを含めてすべて総督の指名であった（p.135）。第2回の出席者の内訳も、ガンディーが加わったほかはあまり変化がなく、ガンディーは、自分以外はみな指名による出席者だといっている〔CWMG Vol.48, 1971, p.96〕。

第1回の会議でムスリムの出席者たちを取り仕切ったのは、総督の行政参事会（内閣に相当）の一員で会議には参加していないフセイン（Fazl-i-Husain）で、彼は分離選挙制の維持とパンジャブ州とベンガル州における過半数のムスリム議席の確保のため力を尽くした。第2回会議でもフセインの指示を受けたムスリム代表たちの活動は活発だっ

た。ガンディーに近かった穏健派のシャーストリー (Srinivasa Sastri) は次のように書いている。「彼らは保守党に取り入っている。彼らはインドの州自治だけを要求し、中央で責任を持つことを望んでいない。ムスリムたちは後者にはまったく関心がない」(p.154)。言い換えればムスリムが多数を占める州で権限を握り、またそのような州の数を増やしたいが、全インド規模では多数のヒンドゥーに対して劣勢であるから、あえてインドが独立することは望まない、というのである。独立が避けられないのであれば、その場合にはインドを分割することがその先にみえてくる。しかし、この時期にはまだそのことは連盟その他のムスリム指導者の日程には上っていなかった。そのためには何か大きなきっかけが必要であった。

ガンディーは、ほとんど四面楚歌といえる状況にはあったが、ムスリムに対し、分離選挙制、ムスリム多数州での過半数議席保障、ムスリム少数州での人口比以上の議席留保、州への分権化、中央議会での3分の1議席の留保など、「ネルー報告」やその後の議論でムスリムに容認されていなかった諸特権を譲歩するとした。これと引き換えに彼が提案した条件が2つある。ひとつは、ムスリムが会議派の独立要求を支持すること、もうひとつは、分離選挙制か合同選挙制かについてムスリム有権者の投票を求めるといったものであったが、交渉は1931年10月17日に打ち切られた(p.155)。これらの条件はどちらもムスリム代表団の気に染まなかったものと思われる。ジンナーがどのような態度をとったかは示されていない。

円卓会議のあとで、イギリス政府は、「コミューナル・アオード」といわれる決定においてジンナーなどの主張した保護規定をほとんどそのまま認めた。ジンナーは、それならば合同選挙制に譲歩してもよいとして会議派との会談に入り、この点を含む5点の合意事項に達したが、ムスリム内部の強硬派の容れるところとならず、会議派と連盟の協定はならなかった(pp.179-180)。

1909年、19年に次ぐ20世紀になって3番目の改革は35年に施行され、拡大された有権者層を基盤

とする直轄州での責任内閣制と、結果的には不発に終わったが藩王国を含むインド全体の連邦化を目指すことになった。その第1歩となったのが1937年の州議会選挙で、分離選挙制によって行われた。会議派は議長にモーティラールの子で大衆的なアピールのあるネルー (Jawaharlal Nehru) をたてた。しかし彼は、議長演説で、宗派間の問題にほとんど触れず、「この問題の真の解決は、(中略) 経済問題が浮上するとき初めて可能になる。(中略) 大衆と下層中産階級は同一の政治的経済的問題に直面しているのである」と、社会主義的傾向を持つものに特有な経済問題に他の事柄を還元する態度をみせた。また会議派の選挙綱領も、「コミューナルな問題は、(中略) インドの主要な諸問題、つまり貧困や広汎な失業とは関係ない」と同一の特徴をみせている。これに対しジンナーはムスリムにとっては保護措置がほしいだけだといっている。ネルーの就任以来ジンナーと会議派の関係は悪化した(pp.189-190, 198)。

このときのネルーのコミューナル問題に対する態度は、ガンディーの不可蝕民(ハリジャン)問題に対する態度と比べると興味を引く。ガンディーは、そのハリジャンの地位向上を目指した運動で、彼らにヒンドゥー寺院が開放されることを重視した。そして、経済的・教育的な向上がより重要ではないかという批判に対し、たとえ経済的向上があっても不可蝕民としての差別は残るとして、経済に還元する態度をとらなかった。彼の主眼がハリジャンの同化にあったせいでもあろう。しかし、そのガンディーに対しても、コミューナルな思想をイデオロギーとして把握することができなかったという批判がある^(註1)。

III 州議会選挙と方向転換

1937年の州議会選挙では、各州議会のムスリム議員の定員合計499人に対し、連盟はわずか105議席、かろうじて5分の1を得ただけの敗北を喫した。会議派は27である。連盟議員が多かったのは連合州とボンベイ州で、いずれも将来のパキスタンを構成するものではなかった(p.201)。会議派は過半数

の州で多数を獲得して州政府を組織した。これには会議派の内部から議長のネルーをはじめとする反対もあったが、州政府を組織してこれを活用すべきだというガンディーの意見によって態度が決まった。

前年にフセインが急死したことでジンナーにとってムスリムの中での最も手ごわい対抗者はいなくなっていた (p.196)。しかしこの敗北はジンナーにとって大きなショックであった。連盟は、選挙後の1937年10月にラクナウで大会を開くが、ジンナーはここで初めてヒンドゥーのインドとムスリムのインドとの差異を強調し、「そのイスラム・カードを切った」(p.217)。連盟も1935年改革が規定する連邦の結成に反対の立場をとった。これはインドの独立に反対することと同じ意味を持つ。1936年2月に、つまり59歳になるのに「これまで回教寺院に行ったことがない」(p.182)というジンナーが、いまやこれまでの「ムスリム・ゴーカレー」を目指したことや、円卓会議でムスリムの強硬派と一線を画したことなどと決別し、全人口の4分の1を占めるムスリムの宗教感情にアピールする方向に大きく舵を切ったのである。

ガンディーは、ジンナーのラクナウ・スピーチに「非常に傷ついた」、「その全文が宣戦布告だ」と書き、私が帰国したころは「皆があなたをヒンドゥー、ムスリム両方の希望だとうわさしていたが、あなたはまだ同じジンナー氏か」[CWMG Vol.66, 1976, pp.257, 350]と聞いている。両者は1938年4月に会談している。このときジンナーは、それぞれに宗派の代表として会いたいとガンディーにはのめない条件を出して、あたかも同席を回避するような、つまり合意の形成に関心がないという態度をみせている。これは、その後も分離独立の実現まで一貫してジンナーにみられた態度である。

このころには会議派州政府の政策を多数派ヒンドゥーの横暴として非難する声が連盟によって高められていった。しかし、インドに旅行中だったアメリカのジャーナリスト、ジョン・ガンサーの夫人フランシス (Frances Gunther) は、1938年に会議派への不満の具体例をひとつも提供されなかった。また、1940年にインドを訪問したイギリスの閣僚ク

リップス (Stafford Cripps) も、ひとつの例は提供されたが、調べた結果には実体がなかった (p.224)。野党の立場にあった連盟は、「どのような進歩的な社会経済的な計画」(p.225)も提示することができなかった。この時期にはまだエリート行政官ICSの半分近く、州の警察長官のほとんど、州より下位の県の警察長官の大部分がイギリス人であり、中下級の警察官には多くのムスリムもいたが、総督府の内務部にもヒンドゥーの横暴の記録はなく、非難が最も激しかった連合州、ビハール、中央州の知事たちの証言にも実質的なものはなかった (pp.227-229)。

これに対し官僚たちの中でのガンディーの評価は高かった (p.243)。フランシス・ガンサーはネルー宛の手紙で、彼は「イギリス皇帝が会議派に派遣した個人的な使節」のような存在で、没後にウェストミンスター寺院に葬られても驚かないといっている (pp.243-244)。しかしガンディーは、連邦制実現の折には連邦議会への藩王国からの議員を指名ではなく選挙で決めるようにという難しい条件を出していた。ジンナーも自分の道を歩み、1939年2月に初めて総督にインドの分割案を示唆し (pp.248-249)、同年4月にはムスリムを初めて「ネーション」という言葉で呼んだ。ヒンドゥーとムスリムは異なる民族であるとする「二民族論」である。また、行政参事会の中には、このまま会議派の地位を強化することへの強い懸念があった。この懸念は、「インド政治におけるひとつの基本的な要因」としての「インド・ナショナリズムと釣り合いを取るためムスリム分離主義を元気づけるというイギリス官僚機構の傾向」(p.256)を示しており、先の「イギリスとムスリムとの計画」の延長上にある。

1939年8月には、アリーガル・ムスリム大学の教員たちが、英領インドに北西部つまりパキスタン、ベンガル、ヒンドスタンの3つの独立国家を作り、さらに最大の藩王国で藩王家がムスリムであるハイデラバードを4つ目の独立国とする案をジンナーに提示し、ジンナーはこれを総督に伝えた (p.260)。後にハイデラバード自身が独立の意図を明確にするが、どの範囲の版図を考えていたかは今なおはつき

りしていない。西海岸の港湾都市ゴアまでを含んでいたとの研究もある。

IV ラホール決議とガンディー・ジンナー会談

第2次大戦が始まり、イギリスが一方向的にインドを戦争に引き入れると、会議派はこれに抗議してその掌握下にあった各州政府を総辞職させた。州政府を建設的に利用するというガンディーの考えにもかかわらず総辞職させたのか。彼は、戦時の条件下で州政府は無能力だということがわかってもおその地位にとどまるのは不名誉なことだ [CWMG Vol.70, 1977, p.344], 戦争努力に協力することはできないからとどまるのは不可能だといっている [CWMG Vol.75, 1979, p.38]。この総辞職が連盟に大きな活動の余地を与えたことを否定するのは難しい。本書は、1942年8月からのインド撤退要求闘争によってガンディーや会議派の幹部が逮捕され、その結果ジンナーに広い活動舞台を提供したことを、「ガンディーは重大な、ほとんど許しがたい誤算をした」(p.303)としているが、総辞職そのものには批判的でない。

1940年3月、連盟はラホールでの大会でついにインドを分割して北西部と東部のムスリム多住地域にムスリムの諸国家を作ることを要求した。ジンナーはその総裁演説で、ヒンドゥーとムスリムとは「通婚もしなければ食事をともにすることもなく、相反する考えや観念を持った違う文明に属している」とし、ムスリムはいかなる基準によってみても民族であり、自らの故郷、領土、国家を持たなければならない、ガンディーは、ムスリムの代表としての私にヒンドゥーの代表として会いに来るべきだ、会議派はヒンドゥーの組織ではないかと述べた (pp.279-281)。

まもなくイギリスではチャーチル (Winston Churchill) が首相に就任した。彼はインドの1935年の改革に執拗に反対し (それによって保守党内の反主流派に追いやられたことが今回の首相就任の一因となる), 「ヒンドゥーとムスリムの反目をインドにおけるイギリス統治の砦である」(p.290) とみな

していた人である。その彼が自ら加筆して (p.292), 総督の名で「8月提案」と呼ばれる改革案が提示された。これは、少数派 (ムスリムをさす) へのイギリスの義務を強調したもので、ムスリムに一種の拒否権を与えるものであり、1942年3月に来訪したクリップス自治領相の提案も同様であった。この時イギリスのエイマリー (Leopold Amery) インド相は、総督への手紙であからさまに「私の考えではジンナーはこれで事実上パキスタンを獲得したとわかって満足するだろう」(p.300) と述べている。イギリス側のこのような態度の背景には、インドが分割されればそれだけ弱体化し、イギリスへの依存が維持されるというイギリス帝国の立場からの計算があり、藩王国の独立も想定内であった (p.300)。連盟の路線がこれと合致するものであったことは言うまでもない。従来の英印交渉史上では「8月提案」よりもクリップス提案のほうが重視されていたと思われるが、以上の経緯からこの比重はむしろ逆であろう。

ではガンディーはどうであったか。彼はすでに円卓会議の折に、各コミュニティがそれぞれの見解を持ち出すことが重視されたからまとまらないのだといていたが、クリップスの提案が挫折したあと、藩王たちとの条約や少数派への義務などは要するにイギリスが作り出したものだと批判した [CWMG Vol.48, 1971, p.293; vol.76, 1979, p.50]。彼は分割には原則的に反対であったが、ムスリムにそれを強いることはできないとしていた。しかしそうなった場合でも「人口の大部分がヒンドゥーである無数の農村に住んでいる一握りのムスリム、そして同じように自分たちが一握りであるヒンドゥーたちはどうなるのか」 [CWMG Vol.70, 1977, p.283] と、分割によって問題は解決しないのだと指摘した。ジンナーの回答はなかった。回答がありえただろうか。

ガンディーは釈放された後、1944年9月にジンナーと会談を行った。これは、彼がジンナー宅を18日間も連続して訪問するという形をとった。そのこと自体がジンナーのムスリムの間での地位を高めたことは想像にかたくない。しかしガンディーは、「連盟と会議派との合意へのほとんど普遍的な熱望」

(p.310) に応えようとしていた。ガンディーが会談の基礎としたのが、会議派有力幹部の一人であるラージャーゴバラチャリ (C. Rajagopalachari) がその2, 3年前に起草し、獄中にあったガンディーの同意を得た6項目の提案、いわゆる「ラージャージー方式」である。

この「方式」についてはこれまでインドでも研究がない。6項目の概要を記すと以下のようになる。(1)連盟はインドの独立要求を支持し、会議派とともに暫定中間政府の樹立に協力する。(2)戦争の終了後に、インドの北西部と東部とでムスリム人口が絶対多数を占める接続した県 (district) を確定する。これらの地域では、成人選挙権の原則によるあらゆる住民の投票によって、ヒンドスタンからの分離の問題を決着する。過半数がヒンドスタンから分離した主権国家の創設に賛成なら、その決定は実行される。(3)すべての当事者たちはその見地を自由に広めることができる。(4)分離がなされた場合は、国防、商業と通信、およびその他の基本的な目的のための相互の協定を結ぶ。(5)人口の移動は完全に自由な意思によってのみ行われる。(6)これらの条件は、インド統治のための完全な権力と責任がイギリスによって委譲された場合にのみ拘束力を持つ [CWMG Vol.76, 1979, p.456]。

(2)で「県」と述べているのは、ジンナーがその要求するパキスタンの範囲をなかなか明らかにしなかったからである。またあらゆる住民と念を押しているが、ジンナーはこれらの地域における自決の権利はムスリムだけが行使しえると主張した (p.310)。あらゆる住民としていることは、制限された選挙権の下にあって中産階級のためのポストの要求から大きく出ることのなかった運動がそこから抜け出すことを意味したとあってよいだろう。(4)においてガンディーは、独立後の両国の緊密な関係を望んだが、ジンナーの省みるところとはならなかった。(6)は、インドがまず一体のものとして独立し、そのうえで分割するかどうかを決めるというガンディーの考えを反映しているが、ジンナーは、上述のよう

にイギリス側の支持を得ながら、分割は独立と同時になされるべきだと主張し、ついにそれを貫いた。ガンディーはこの「方式」は連盟ラホール大会の要求に形を与えたもので解決の唯一の方法であると主張したが、ジンナーは例によって明確な約束を与えることをせず、対案を示すこともなく、「よりよい条件を政府から獲得する」ことを望んだ (p.311)。独立前後の流血の中でガンディーは、「方式」に具体化されている彼の提案を「ジンナーが受け入れていけば現状のすべては防げただろう、私はさらに譲歩する用意があったのだ」といっている [CWMG Vol.89, 1983, p.139]。

インドおよびその両側をはさむ形でパキスタンが独立するのはこの会談から3年足らずのことであった。それはジンナーの手腕を物語るものでもあろう。しかし、そのパキスタンでは生前にジンナーが要求したような州への分権は実現しなかった。そのため東パキスタンはバングラデシュとして分離独立し、「二民族論」はその根拠を失った。ジンナーはまたその目的のためにはコミユナルな暴力が振るわれるのを抑えようとしなかった。しかし、「魔神は用いられたあと簡単に瓶の中に閉じ込めることはできなかった」 (p.328)。本書は分離独立でほぼ叙述を終えており、1948年9月11日に彼が急死するまでのパキスタン独立後の部分にはほとんど触れていないが、ジンナーの生涯からは、ガンディーとは異なり、今日の人類が直面する諸問題の解決の鍵はほとんど見出すことができない。それが本書を一貫する「イギリスとムスリムとの計画」の結末であった。このストーリーは完結したのではなく、本文の末尾にいうように「異なる、そして苦痛に満ちた方法でインドとパキスタンを今でも訪れる遺産」なのである (p.333)。

(注1) 例えば Bipan Chandra, "Gandhiji, Secularism and Communalism." *Social Scientist* Vol.32, Nos. 1-2, 2004.

(元文教大学教授)